

文学部への教員の着任

人文学研究科長・文学部長 白鳥 義彦

神戸大学では現在、教授、准教授、講師、助教のそれぞれの職階に応じたポイント数を積算して部局に配分し、その総ポイント数の中で教員人事が行われています。このポイント制での人事運営の下、余裕のあるポイント数が配分されると良いのですが、現実はなかなか難しい状況で、文学部・人文学研究科ではしばらく前から、教員の退職後、教員枠が二人の専修は2年間、三人以上の専修は5年間の間隔を空けた上で、新たな教員の採用を行っています。教育の面でも研究の面でも、教員ポストがこれだけの期間にわたって空席となるのは望ましいことではないのですが、予算面での制約ということで、いかんともしたいというのが残念ながら実状です。また、以前は新任教員は助教授・准教授で着任というのが普通に行われていましたが、使用ポイント数の関係および40歳未満の若手教員の比率が数値目標となっているため、現在は講師もしくは助教で着任という運用も行っています。

こうした中、2023年4月以降の近年の2年強の教員の着任数は23名（2023年度8名、2024年度12名、2025年度3名、再任等も1名として計上）となっています。前任者の退職からの年数経過による後任者の着任が、2023年度は3名、2024年度は4名ありました（2025年度は0名）。着任の総数との人数の差（2023年度5名、2024年度8名、2025年度3名）の主たる部分は、研究プロジェクト等の特定の任務を担当する特命教員によるものです。これまでも、地域連携センターを中心として特命教員は在籍していましたが、ここ2年ほどはそれ以外の様々な外部資金による新たな教員の着任が増えています。こうした傾向は、基盤的経費予算が削減され、競争的な予算に置き換えられてきている近年の動向を反映していると言えるかもしれません。

教員の退職後、すぐに新たな教員が着任できないのは、先にも述べた通り望ましいことではありません。一方、特命教員が文学部・人文学研究科に着任されるというのは、大型の研究プロジェクトが部局で進められているということであ



り、それ自体は望ましいことと言えるでしょう。国際公募で実際に海外から着任された例もあり、そうした面は部局の活動のグローバルな展開の一端を示してもいます。

特命教員は若手の方が多いですが、縁あって神戸大学文学部・人文学研究科に着任されたので、任期付きではありますが、研究を進めて次のステップへの足掛かりとしていただければと思います。実際、着任後ほどなく次のポストへ異動された方も複数います。

なお、通常の教員と同じ職務の承継枠で2年間の任期付きでの、日本史学および言語学の教員採用（2026年4月着任予定）の人事選考も現在行っています。

ホームカミングデイ等の機会に、卒業生の皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2~4
最近の著作から	5~7
近況	8



科学と哲学の交差点に立って

ジミー・エイムズ 講師

専門はアメリカ哲学、科学哲学、科学思想史。主な業績として“Temporal Becoming in a Relativistic Universe: Causal Diamonds and Gödel's Philosophy of Time,” *European Journal for Philosophy of Science* 12 (3), 2022 年, “Patternhood and Generality: A Peircean Approach to Emergence,” *European Journal of Pragmatism and American Philosophy* XI (2), 2019 年など。

私の研究関心は多岐にわたりますが、その大部分は「自然哲学」というキーワードによって包括され得るように最近感じています。「自然哲学」は長い歴史を持つ言葉です。現代では「自然科学」と呼ばれている分野の多くは、かつて「自然哲学」と呼ばれ、哲学の一部と見なされていました。古典力学の礎を築いたニュートンの著書のタイトル、『自然哲学の数学的諸原理』（1687 年）が、このことを端的に象徴しています。現代の私たちから見れば物理学や化学や生物学に分類されるような知見が、形而上学、認識論、科学方法論をめぐる哲学的な考察と密接に連関し合い、自然哲学という総合的な知の営みを成していたのです。

18 世紀から 19 世紀にかけて、物理学・化学・生物学は哲学から分化し、自律的な学問分野を形成するようになりました（人間を対象とする経済学と心理学が哲学から分化したのもちょうど同じ時期です）。もちろんこれは、これらの分野が科学として成熟したことを示しています。つまり、研究の前提となる基礎的な概念や理論枠組みについての悩ましい哲学的な問題に煩わされることなく、目の前の具体的な問題を解くための手法が整備された結果です。しかし、科学的な探究は哲学的な思索から完全に切り離して行われるべきかという、そんなことはないかと私は考えています。実際、哲学

から分化した後の時代においても、科学は哲学との深い関わり合いの中で発展してきたと言えます。例えば、哲学者エルンスト・マッハによるニュートンの絶対空間・絶対時間批判が、アインシュタインの相対性理論の着想に大きな影響を与えたことはよく知られています。また、論理学者・数学者クルト・ゲーデルは、一般相対論の基礎方程式の厳密解として、時間がループを成す宇宙モデル（いわゆる「ゲーデル宇宙」）を発見しましたが、この発見の背景には、カントに端を発する時間に関する哲学的な問題関心があったことは注目に値します。

マッハやゲーデルの仕事は、近現代における自然哲学的な実践のうち、特に実りの多かった事例であると言えます。私が関心を持っているのは、過去の偉大な自然哲学者たち——ここで挙げたマッハとゲーデルだけでなく、ニュートン、ライプニッツ、リーマン、ヘルムホルツ、パースなど——の手法を手掛かりにして、現代における新たな自然哲学のあり方を模索することです。学問分野の専門化・細分化が進み、文理の「二つの文化」の断裂がますます深刻化する現代においてこそ、かつての自然哲学において為されていたような、専門分野の垣根をわきまえない自由な思索は、ますます深い意義を有しているように思われます。



古代和歌から文学史を考える

田中智子 講師

専門は古代の和歌文学。主な業績として、『古今和歌六帖の文学史』（花鳥社、2025 年）、「曾禰好忠歌の表現」（『中古文学』112、2023 年 11 月）、「天平宝字元年十二月の伴家持歌—立春をめぐって—」（『上代文学』130、2023 年 4 月）など。

古代の和歌文学を専門としています。和歌は五七五七七の音数律を基本とする短詩形文学で、古代の貴族は、歌会などの公的な場で歌を詠むこともあれば、恋人や友人間の私的なやりとりで歌を詠むこともありました。そこで貴族たちに重宝されたのが『古今和歌六帖』（10 世紀後半の成立か）という歌集です。同集は 4500 首もの歌を収めた大部の歌集で、500 余の項目別に和歌を類聚しており、詠歌の手引書として編纂されたとみられます。私は長らくこの歌集について研究を続けてきました。

『古今和歌六帖』は鑑賞、味読の対象というよりはむしろ、実用書として人々に重用されたとみられますが、それゆえにこそ、文学史上重要な意義を有しているように思われます。例えば『古今和歌六帖』の「面影」（古語の「面影」は「まぼろし」や「幻影」の意に近い）項には 13 首の歌が収められていますが、「面影」を詠んだ歌は『古今集』等の勅撰集にはほとんどみられません。そうしたなかで、『古今和歌六帖』

は多様な採歌源から歌を収集し、「面影」詠の類型を提示したのでした。例えば「夕暮は物思ひまさる見し人の言問ひし顔面影にして」というもともと『万葉集』に載っていた歌は、夕暮れ時に、恋人がかつて自分を訪ねてきたときの姿を幻視する心を詠んだ恋歌です。一方、『源氏物語』冒頭の桐壺巻に、桐壺帝（光源氏の父）が桐壺更衣（光源氏の亡き母）を偲ぶ場面があるのですが、その様子は「にはかに肌寒き夕暮れのほど」、「人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるにも」と描かれています。作中屈指の名文とも評されるこの描写の背後には、先掲の「夕暮は……」の一首の表現が横たわっているのではないのでしょうか。

このように、物語の散文などにも和歌的な発想がみとめられることが、私にはたいへんおもしろく感じられます。今後は『古今和歌六帖』に限らず、10 世紀後半頃の和歌文学に軸足を置いて、広く古代の文学史を見通すような研究を目指したいと思っています。

日本語はどのように変化してきたのか

池田來未 講師

専門は日本語文法。主な業績として、『複合動詞「～ハツ」の歴史の変遷』（『国語国文』91（7）、2022年7月）、「複合動詞「～ヌク」の史的変遷」（『国文』（134）、2021年7月）など。

専門は日本語文法です。「読み通す」「生き抜く」といった複合動詞の歴史的变化について研究しています。奈良時代から現代まで、いろいろな時代の資料からその言葉が使用されている用例を集めて、ある言葉の意味、用法や共起する語がどのように変化してきたのかを調査しています。

『源氏物語』や『平家物語』といった古文を読んでいると、全く理解できず、まるで日本語ではない別の言語のようだ、と感じる人も少なくないかもしれません。しかし、こういった古文が少しずつ変化してきて現在私たちが使う日本語になったのであり、古文と現代日本語はつながっているのだと考えています。

例えば現代語でも「～抜く」は「踏み抜く」「引き抜く」「生き抜く」「困り抜く」のように、いろいろな動詞と共に用いられます。「踏み抜く」「引き抜く」は物体が別の物体内部を貫通する、ある物体から別の物体を抜き出す、という意味を表します。一方で「生き抜く」や「困り抜く」はどうでしょうか。これらは「生きる」という動作の完遂や「困る」という程度の甚だしさを表しています。

「踏み抜く」「引き抜く」には物理的な貫通や拔出といった、

「抜く」という動詞が古くからもつ意味が残っていると考えられます。しかし、「生き抜く」や「困り抜く」はどうでしょうか。ここでは物理的な貫通・拔出の意味は希薄になり、動作の完遂や程度の甚だしさといったより抽象的な意味を表しています。古い資料をたどっていくと、前者の用例は古くから見られるのに対し、後者はそれよりも後の時代から用例が見られることが分かりました。ここからも、現在私たちが使っている言葉は長い時間をかけて徐々に変化してきたことが分かります。

現代語の「引き抜く」や「生き抜く」を見て、どれも「抜く」という同じ動詞が後ろにくるのに、このような違いが生じるのはなぜだろう、用法が複数あるとすればどの順に派生したのだろう、と知りたくなったのが、この研究を始めたきっかけです。最近では、時間から程度といった用法の変化はどのような条件で起こるのか、また、ある用法から別の用法への変化の中で、こういった変化が起こりやすいといった傾向がみられるのか、といった点も気になっています。今後そうした点も考慮しながら研究を進めたいと考えています。

イスラーム教徒の女性の服装規制と抵抗運動

山下泰幸 講師

社会学、ポストコロナ研究。主な業績として、伊達聖伸・見原礼子編『イスラームの定着と葛藤』勁草書房、2024年（分担執筆）や「ミクロな観点における同化とポストコロニアル性—フランスの高度なムスリム女性の語りから」『ソシオロジ』67（1）、2022年（論文）など。

公立学校においてムスリムの女子生徒が髪の毛を覆うスカーフ（ヒジャブ）を着用することの是非を問う、いわゆる「スカーフ論争」がフランスで生じ、結果として2004年に着用禁止となったことについてはご存じの方も多いかと思います。ただし日本ではあまり報道されませんが、それ以降も今日に至るまで、フランスでは手を替え品を替えイスラーム教徒の女性の服装が問題化され、さまざまな法規制が行われてきました。例えば今ではムスリム女性が好むとされるゆったりとしたワンピースやロングスカートの着用が公立学校において禁止となり、さらに2025年6月現在、マクロン大統領は路上やカフェなどあらゆる公共の場において15歳未満の少女がスカーフを着用することを禁止する新たな方針を打ち出しています。この種の政策決定において、当事者であるムスリム女性たちの声が聞き入れられることは決してありません。

こうした規制が行われる理由として、しばしばフランス独自の社会規範としてのライシテ（非宗教性の原則）の存在が指摘されます。しかし歴史を紐解いてみると、ライシテが適用されていなかったフランス植民地時代のアルジェリアにお

いても、現地の女性からスカーフをはぎ取る行為が、時に輝かしい儀式として、時にジェンダー暴力として実践されていました。こうした文脈を考慮するならば、現代フランスにおけるムスリム女性の服装への執拗な関心は、植民地主義と結びついた文化的レイシズムとしてのイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）という観点から分析する方が適切であると考えます。

ただしこうした状況に対してムスリム女性たちはただ黙って見ているわけではありません。彼女らは時に自らを組織化し、イスラーム教徒以外の人々も巻き込みながら、多様な抗議運動を展開してきました。例えば、あらゆるスポーツ公式大会におけるスカーフの着用を禁止する法案が可決されそうになった際には、「ヒジャブーズ」を名乗る、スカーフを身に着けた選手を中心に構成された女子サッカーチームが、国会議事堂の前で親善試合を行いました。この抵抗運動はユーモラスでありながら、声を持たない哀れな犠牲者という典型的なムスリム女性像がいかに偏っているかを力強く示しています。



自らのアイデンティティと華僑華人、台湾研究——歴史を書き、残すこと

岡野翔太 助教

専門は華僑華人研究、近現代台湾研究、中国近現代史。主な業績として『二重読みされる中華民国—戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」』（大阪大学出版会、2023年）など。

2024年4月に人文学推進インスティテュートの助教として着任しました。専門は華僑華人研究、近現代中国・台湾史で、とくに第二次世界大戦後の日本における「台湾系華僑」に関する研究をしています。

私は神戸で生まれ育ち、神戸中華同文学校に通いました。父は台湾出身のニューカマー（1979年来日）で、私は幼いころより日本と台湾の間を行き来して来ました。「台湾」という島は、戦前は日本の植民地下にあり、1945年の日本の敗戦によって中華民国に接收されます。しかし、その中華民国は1945年時点では中国大陆と台湾双方を統治していましたが、1949年、大陸には中華人民共和国が誕生し、中華民国は中央政府を台湾へと移します。中華人民共和国と中華民国はそれぞれ正統な「中国」を主張し、日本は1972年まで台湾の中華民国を「中国」として承認していました。そして1972年に日中国交正常化／日華（台）断交がおきます。1990年代以降、台湾で人びとの「台湾人」意識が高まりました。一方、2000年代に神戸で小・中学生時代を過ごした私は、親のパスポートは「中華民国」の文字が書かれているにも関わらず、中華同文学校の歴史教科書上ではその「国」が1949年で終わったことになっていることに、戸惑いを覚えていました。

日本には植民地支配とその後の中華民国との外交関係が

ら、戦前・戦後と台湾からの留学生・移住者は途切れることなく存在していました。断交後も同様です。しかし、在日華僑社会に反映された冷戦構造、日本の外交関係、中華人民共和国・中華民国それぞれのナショナリズム、1990年代以降の台湾内部のナショナリズムの変化（台湾人意識）が渦巻くなかで、日本在住の台湾出身者や中華民国国籍を持つ人びと（総称して「台湾系華僑」）の声は、「華僑」という名称の背後に隠れ、外から曖昧にしか捉えられてきませんでした。「自分のような人びとの歴史は在日華僑研究のなかにない」。それが大学院進学後に先行研究を読んでいく中で得た感想でした。私はそうした戦後東アジアの政治的な要因で周辺化された人びとの歴史について、政府・団体の一次史料の収集・分析のほかに、個人の語りも対象としながら描いていくことを課題としています。

このほかにも現在は、戦後神戸の華僑団体の資料の保存も同時に進めています。中華民国留日神戸華僑総会（1945年10月発足）には成立初期の配給、華僑の家族登録、政府（駐日公館）との書簡などがあり、これらの記録の整理に取り組んでいます。こうした記録の保存を進めるとともに、中華民国や中華人民共和国がそれぞれの時代で在日華僑にどのような影響を与えたのかについて考えることを、今後の研究課題としています。



谷口忠大『記号創発システム論：来るべき AI 共生社会の「意味」理解にむけて』

新曜社 2024年9月

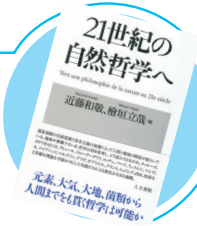
本書は、谷口忠大氏が展開する記号創発システム論という枠組みを分かりやすく説明し、その枠組みの中にさまざまな現象を位置づけるものである。私は、「AI ロボット社会 記号を用いるロボットと共生するとはどういうことか？」と「創発する倫理 記号創発システム論が描く倫理の未来」というセクションを担当した。(新川拓哉)



近藤和敬・檜垣立哉編『21 世紀の自然哲学へ』

人文書院 2024年7月

近年、自然哲学がにわかに注目を集めている。「自然哲学」と言えば、哲学から物理学や生物学や化学などが分化する以前の時代において、自然探究の学問に与えられていた名称である。それは、形而上学や認識論や科学方法論に関する哲学的考察をも包含する、総合的な知の営みであった。今日、なぜ再び自然哲学が求められているのだろうか。それは自然科学とどのような点で異なるのだろうか。本論集では、17 人の哲学者がそれぞれの専門の立場から、21 世紀に来たるべき新たな自然哲学について縦横無尽に論じている。エイズは、ライプニッツのモナド論を足掛かりに心身問題について考える論考を寄稿している。(ジミー・エイズ)



有澤知世『山東京伝研究—考証・意匠・戯作—』

ベリかん社 2025年2月

江戸戯作の代表的作者として名高い山東京伝（1761－1816）は、寛政の改革以降、近世初期風俗や芸能の考証に傾倒したことが知られるが、活動の幅広さゆえに総合的評価が困難であった。本書では、江戸における古書画考証趣味のネットワークとの繋がりや、考証を虚構化する知的遊戯、移ろいゆく「今」を後世へ伝えようとする歴史的意識等に注目し、京伝の雅俗にわたる営為を、十九世紀江戸という都市空間を生きた文化人・岩瀬醒の営為として捉えなおした。(有澤知世)



田中智子『古今和歌六帖の文学史』

花鳥社 2025年2月

『古今和歌六帖』は『万葉集』『古今集』等を出典とする歌のほか出典未詳歌を数多く収め、『枕草子』『源氏物語』等の後世の作品に影響を与えた、文学史上重要な作品である。しかし序文を欠くことや現存諸本の本文に瑕疵が多いことから、いまだ未解明の点も多い。本書は他作品との影響関係を重視して『古今和歌六帖』に分析を加え、同集を中心に据えた文学史の見取り図を描くことを企図したものである。(田中智子)



山本佳樹、市川明、香月恵里、増本浩子（共編）『ドイツ文学と映画』

三修社 2024年11月

映画監督たちはドイツ文学作品にどのように向き合い、それを映像として表現したのか、アダプテーション研究の視点から読み解いた一冊。中世叙事詩『ニーベルングンの歌』からシュリング『朗読者』まで、ドイツ語圏の名作を厳選してその映画化作品を分析している。増本はデュレンマット『老貴婦人の訪問』を原作とするセネガル映画『ハイエナ』と、世界的ベストセラーとなったジュースキント『香水—ある人殺しの物語』のティクヴァ監督による映画化作品の分析を担当した。(増本浩子)



広瀬和雄編『日本考古学の論点』上・下

雄山閣 2024年6月

前方後円墳研究、古代集落研究などを通じて日本考古学研究を牽引してきた広瀬和雄氏編により、上・下巻合わせて 122 人の論者が日本考古学の論点を独自に検討する。古市は文献史学の立場から下巻第 7 章に「ヤマトタケルの出自」を執筆、広く知られたヤマトタケル伝承が 5・6 世紀の美濃・尾張地域の社会の中で生まれた伝承であることを論じている。(古市晃)



大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会論集』Ⅱ

大阪市文化財協会 2024年12月

2025年3月、惜しまれつつ解散した大阪市文化財協会の関係者による論集。大阪平野と大阪湾をめぐる考古学の諸問題を中心としつつ、日本と朝鮮半島、及び中国との交流史に関わる論考を含む。古市は文献史学の立場から「国家形成期の武庫と猪名」を執筆、5・6世紀の大阪湾西部の港・造船・木材をめぐる、地域勢力と王権の対立と融合の歴史を検討した。(古市晃)

**新古代史の会編『歩いて学ぶ日本古代史1 邪馬台国から大化改新まで』**

吉川弘文館 2025年1月

古代史の舞台を実際に訪ねて学ぶことを目的に、現地の遺跡との関係を重視しながら幅広いテーマが集められた入門書シリーズの第1冊。邪馬台国から大化改新までの時代を扱う。古市は「葛城氏と渡来人」、「飛鳥の宮と蘇我氏」の2篇を執筆、5世紀から7世紀にかけて王族と共に歴史を動かした葛城氏、蘇我氏の事跡とその展開を、現地の情報を紹介しつつ検討した。(古市晃)

**辻田淳一郎編『倭の五王の時代を考える 五世紀の日本と東アジア』**

吉川弘文館 2025年3月

考古学と文献史学の協業により東アジア国家情勢を包括的に検討。鏡、百舌鳥・古市古墳群、南朝遣使、東国の古墳時代などの多様な視角から、5世紀の列島社会と東アジアの関係を展望する。古市は「倭の五王の時代の王宮と社会」を執筆、これまであまり知られていない5世紀の王宮のあり方を紹介し、倭王の系譜と合わせてこの時代の王権が流動的で不安定な状況にあったことを論じている。(古市晃)

**宮崎健司編『日本古代中世の社会と宗教』**

法蔵館 2025年3月

古代中世の社会で仏教や神祇信仰などの宗教が果たした役割を多角的に論じ、地域社会と宗教という視点の重要性を問い直す論集。古市は「桑田玖賀媛・播磨速待伝承の成立とその背景」を執筆、『日本書紀』に仁徳天皇の時代のこととして語られるこの伝承が、5・6世紀における丹波と播磨、及び王権との関係を考える上で重要な伝承であることを検討している。(古市晃)

**ロバート・パーカー（栗原麻子、竹内一博、佐藤昇、齋藤貴弘訳）『古代ギリシアの宗教』**

名古屋大学出版会 2024年8月

本書はギリシア宗教史の大家ロバート・パーカー（オックスフォード大学名誉教授）による On Greek Religion, Ithaca, NY; London, 2011 の全訳である。「教会」も「啓示」もない古代ギリシアの「宗教」とは、どのようなものだったのだろうか。古典文献、考古遺物、人類学の知見などを手掛かりに、神々や英雄と人々との関わり方、神話や供犠、祝祭などの実態について慎重に読み解いてゆく好著。(佐藤昇)



レオポル・ミジョット（佐藤昇訳）『古代ギリシアのいとなみ：都市国家の経済と暮らし』
刀水書房 2025年1月

本書は古代ギリシア経済の碩学レオポル・ミジョット（ラヴァル大学（ケベック）名誉教授）による入門書 *L'économie des cités grecques*, Paris, 2002 の全訳である。古代ギリシアの都市国家（ポリス）では、前8世紀から後2世紀までの間、およそどのような経済活動がおこなわれていたのだろうか。経済に関する思想、貨幣の意味、農耕、手工業、商業の実態、国家統制や支援策など、要点が手際よくまとめられている。（佐藤昇）



宮下規久朗『名画の力』
光文社 2024年7月

本書は、私が産経新聞に15年以上連載している「欲望の美術史」をまとめたもので、同種の光文社新書として、『欲望の美術史』『美術の誘惑』『美術の力』『名画の生まれるとき』に続く5冊目となる。本書は、2023年に根津美術館で開催された画期的な「北宋書画精華」展や大阪中之島美術館の開館など、この3年間の主だった展覧会と美術界のトピック、調査旅行したフィリピンのキリスト教美術と近代美術などについて論じている。（宮下規久朗）



宮下規久朗『50の名画でたどる西洋美術史』
KADOKAWA 2024年10月

本書は、2012年に角川ソフィア文庫から出版した『知っておきたい世界の名画』をカラー版にしたものだが、最新の知見によって解説の多くを書き直して増補している。西洋絵画の父であるイタリアのジョットから現存する最大の巨匠、ドイツのゲルハルト・リヒターまで、最重要名画を美術史的に解説し、さらにその重要度を★の数で表した。最高の★★★★は、「死ぬまでに誰もが見るべき人類究極の至宝」で、9点を選んでいる。（宮下規久朗）



**小助川元太・薬師寺君子・野田麻美・水野裕史編
『帝鑑図と帝鑑図説—日本における勸戒画の受容』**
勉誠社 2024年11月

古来、為政者がいかにあるべきか説くため、他者や過去の出来事を鑑として戒めとすべき手本を示した「勸戒画（鑑戒画）」のなかで、中国帝王にまつわる故事を取り上げた「帝鑑図」は、屏風や障壁画など室礼や儀礼空間の荘厳として、また、挿絵となり物語と共に『帝鑑図説』として版本化され、東アジアの文化の基底として大きな影響を与えてきた。本書は、日本における帝鑑図・帝鑑図説の諸作品を美術史・文学研究の視点より、多角的に考察したもの。豊富な図版資料また国内作品の網羅的リストも具備し、通説を再検討することで、「帝鑑図」とは何か、という基本的な定義を問い直した。（野田麻美）



**宮原暁・やまだあつし・小野純子・岡野翔太・呉穎濤編
『名古屋、アジアに出会う——文化・歴史・記憶をあるく』**
図書出版みぎわ 2023年2月

本書では20世紀初頭から現在に至るまで、名古屋のなかで繰り広げられてきたアジアとの交流を論じました。これまで日本の対外交流や外国人住民に関する議論は、関東圏・関西圏が主流でしたが、名古屋を通して、大都市とは異なる日本の国際化や文化交流の一端が垣間見えるでしょう。（岡野翔太）



神戸大学での 22 年間

リチャード・ハリソン

私は 2004 年 2 月から 2025 年 3 月まで神戸大学に勤務しました。日本語教育と応用言語学という二つの領域において、多様な学生と向き合いながら、教育・研究活動を続けてまいりました。このたび、これまでの歩みを振り返る機会を得ましたので、主な取り組みについてご紹介いたします。

(1) KOJSP 日本語プログラムの立ち上げと発展

2011 年に神戸大学文学部とオックスフォード大学東洋学部との間で「神戸オックスフォード日本学プログラム（略称 KOJSP = Kobe-Oxford Japanese Studies Program）」に関する協定が締結されました。神戸大学グローバル教育センター（旧留学生センター）と人文学研究科の同僚の先生方と連携し、Kobe-Oxford Japanese Studies Program (KOJSP) を設立しました。このプログラムは、オックスフォード大学の 2 年次学生を対象とした特別な受け入れ制度として始まり、学生たちは神戸で日本語を集中的に勉強するとともに、自ら設定したテーマに基づく自主研究プロジェクトにも取り組みました。プログラム設計にあたっては、第二言語習得理論や異文化理解教育の知見を取り入れ、中級から上級前半レベルまで段階的に学べるカリキュラムを整えました。また、研究活動を支援するためにプレゼンテーションスキルの指導も取り入れ、最終的には各自の研究成果を発表するプレゼンテーションへとつなげました。この KOJSP の授業には、オックスフォード大学の学生だけでなく、他大学出身の多様な国籍の留学生たちも参加しており、教室内は国際色豊かで多文化的な学びの場となっていました。こうした環境は、学生同士の交流をより活発にし、異文化理解を深める貴重

な機会となりました。開始から 13 年間にわたり成果を上げてきた KOJSP プログラムですが、現在私はコースの非常勤講師として、今後も多様化する参加学生のニーズに応じたプログラムの発展に貢献していきたいと考えています。

(2) 応用言語学分野における大学院教育および研究指導

大学院においては、言語学を専攻する学生と共に、教育工学、第二言語習得、教授法、言語政策、異文化間コミュニケーションなど、多岐にわたる主題に取り組んでまいりました。研究指導に際しては、理論的枠組みと実証的アプローチとの均衡を重視し、実際の言語データに基づいた論文執筆を支援することに努めてまいりました。また、言語学講座の教員や大学院生との継続的な議論を通じて、私自身も新たな視座を得る機会に恵まれ、教育とは一方通行ではなく、相互的な学びの営みであることを改めて認識いたしました。これまで指導に携わった学生が、国内外の大学や教育機関において専門的な知見を活かし、教育・研究の分野で活躍していることは、指導者としてこの上ない喜びであり、大きな励みとなっております。

終わりに

神戸大学での年月は、国際交流と学術探究の両面において、私にとってかけがえのない経験となりました。多様な学生たちと共に学び、共に成長することができた日々を、心から誇りに思っています。これからも、日本語教育と応用言語学の分野で得た知見をもとに、次の世代への貢献を目指して歩み続けていきたいと考えています。

お詫びと訂正

2025 年 10 月に刊行した『文学部だより』23 号の紙媒体版について、4 ページ「研究最前線」岡野翔太先生の略歴と 8 ページ「近況」のリチャード・ハリソン先生のお名前に記載漏れがございました。本電子版にて訂正するとともに、ここに記してお詫び申し上げます。

（『文学部だより』編集委員会）